

夢を追う卒業生 その6 平成30年9月20日

私の大学生活

◇今回は、鈴木志野さん（慶應義塾大学文学部）のレポートです！

私は平成26年度関高校を卒業し、国公立大学を目指し浪人していましたが合格せず、東京の私立大学に入学しました。入学から現在に至るまでの私の大学生活を、授業外の活動と授業の2つを中心に綴らせていただきます。

まず、授業外の活動についてです。私は、高校時代は陸上部に所属し、走ることが好きだったので陸上同好会に入会しました。また、様々な見識を深めたいという思いから、社会問題（少子化や食糧不足、軍事問題など）についてディベートを行うサークルに入り、常に周囲の問題に目を向ける仲間たちに出会いました。

皆、それぞれが成し遂げたい思いを持って生活していたため、自分もその何かを見つけようと必死になりました。例えば、カンボジアに赴き小学生の就学支援を行うNPOでインターンをしたり、小学生向けの事業を行う会社で企画や運営に携わったりという経験をしました。

特に、先輩が立ち上げた会社で小学生のやりたいことを応援する取り組みの一環として、動画作成のワークショップの企画や運営に携わったことは、自分が本当にやりたいことに気が付く大きな契機となりました。社長である彼とはサークルを通して出会ったのですが、彼が会社を立ち上げ、小学生向けの事業を始めた際にスタートアップのメンバーを募集していると知り、「ただ子供が好き」という思いだけで手を挙げ、携わらせていただきました。

子供は好き、でも将来子供とどのような関わり方をするのかは見ていなかった私ですが、実際に動いて子供と関わることで、自分が本当にやりたいことはこの分野なのではないか、というものが次第に分かるようになりました。また、スタートアップの事業に関わることを通して出会った方々は、熱い思いをもって人々に何かを届けようと尽力する方ばかりで、自分もそのように生きていきたいとはっとさせられたことも何度もありました。

正直に申し上げますと、カンボジアへ行って何かをしようと決めたことも、先輩の立ち上げた事業に関わると決めたことも、あまり深く考えた結論ではありませんでした。しかし、「あ、行きたいかも。」とか「やりたいかも。」という気持ちに忠実に行動したところ、今後の指針を見出したので、少しでもやっ



てみたいと感じたことはとにかくやってみようとして心に決めました。行動すれば、思いもよらないところで収穫があるかもしれません。



次に、大学の授業についてです。私の大学は一年生のうちは「一般教養」と称する授業が中心で、あまり興味がない授業も少なくありませんでした。2年生になると専攻が分かると、私は叔父がドイツに住み、とても居心地の良い国だと言っていたこと、小学生の時にヘルマンヘッセの「少年の日の思い出」を読み、感銘を受けたことからドイツ文学を専攻しました。

私が通う大学は学生の数が非常に多くありながら、ドイツ文学専攻は非常にマイナーな専攻であるため、私が履修する授業の多くは受講者が10人に届きません。この環境は大人数のクラスでは受け身になりがちな私の姿勢を変えざるをえず、また、周りの仲間前のめりで楽しく学ぼうという姿勢を持っていたので、とても良い刺激を受けました。さらに、教授一人に対して学生の人数が少ないため、より深く長い時間をかけて関わってくださっているように思います。

2年生からは毎日学びの中にどっぷりと漬かっている感覚があるため、大学で学ぶことが好きになりました。東京の私立大、というと大学自体が大きく多くの中に埋もれてしまうようなイメージを持つ人もいますが、必ずしもそうではありません。深く、濃い付き合いができる場があります。

大学に入ると、ほとんどすべての時間の使い方を自分で決めるので、「やりたい！」と思ったことはその気持ちさえあれば叶います。高校生の皆さんに伝えたいことは、「やりたい！」という気持ちに忠実になること（そうすることで今すべきことも見えてくると私は思っています）、そして、窮屈だと感じるかもしれない今という高校時代も二度と戻れない時間であるということです。今しかない高校時代という青春を存分に謳歌してください！

また、これは私の個人的な考えですが、お金を稼ぐためだけにアルバイトに時間を費やさなければならないということは、貴重な時間が非常にもったいないので、そのように考えている人は是非、奨学金を申請することを考えてみてください。（アルバイトに意義がないとは思いません。所謂「社会経験」だと思います。）探してみると、案外たくさんの団体が学生を経済的に支援してくださっていることがわかります。高校を卒業する前から募集を始めているものも多くあります。忙しく大変な時期かもしれませんが、3年生の冬ごろから少しずつ見始めることが良いかもしれません。もちろん返済不要のものをお勧めします。私の大学生活も奨学金に支えられ、「やりたい！」と思ったことに挑戦できたという場面が数えきれないほどあります。



皆さんが楽しい学生時代を送ることを心から願っています。